
エボカション

幸谷遥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エボカシオン

【Nコード】

N1875V

【作者名】

幸谷遥

【あらすじ】

奥様が大事に飼っている悪魔のこと

獣の姿をした悪魔はしばしば貴人たちの狩りの対象となった。美しい獣の多くは凶暴でなかなか捕まらない。

私の家には一頭の獣がいた。本来変幻自在である悪魔は、獣以外の姿にならぬよう黄金の手綱をつけられて、他を見下す目線を持ちながら飼われていた。エスピガは彼をマル・エスピリトウ（悪霊）と呼んだ。

獣になりきった悪魔は名を持たないか、自分自身で忘れてしまうなどして名を失った者。新たに名前つけなおすか、思い出すまで獣以外の何物でもない。

それ故、従姉エスピガは名前ではなく、悪霊と彼を呼んだ。従姉はその獣が招魂を行う悪魔であったことを調べた。獣になった悪魔は言葉を持たなかったので噂話を収集した結果に過ぎない。しかしエスピガはその話をいたく気に入った。

噂から悪魔の名前は知れなかったらしい。マル・エスピリトウは獣以外の姿をとっていたことなどから、どうやら名前を忘れられた悪魔であるらしい。

エスピガが多様な珍しい姿をもつ悪魔を生け捕りながらそれを剥製にするでもなく、飼い始めたのは私が生まれるより前の話だった。従姉弟であるが我々は年が離れており、エスピガが母親代わりだった。

私には早くから母はなかった。父はいつもいない。ほかの家族も滅多に姿を見せず、私はエスピガと柵と塀に囲まれた屋敷で暮らした。

エスピガは二度結婚したが二人とも先に死んだ。娘と息子も幼いうちに病にかかっていない。エスピガは誰の魂を呼び戻したいのだろうか。興味を持ったがいつまでたっても彼女はマル・エスピリトウにそれを願わない。それなのに何故彼を飼い続けるのか合点がい

かなかった。

マル・エスピリトゥを捕まえてからエスピガは狩りに行かなくなった。それも手伝って人付き合いが疎遠になったようだ。家の中にもりがちになった彼女は日に何度か獣の側に行った。獣は犬舎を改築したところに入れられていた。犬はエスピガが狩りをやめたときにお払い箱になった。

「彼は悪夢を食べてくれるのよ」

エスピガは言った。それが本当かはわからないが、マル・エスピリトゥに病魔を食べてもらったことがある。熱病にかかって苦しんでいるとき、エスピガは私を抱いてマル・エスピリトゥのところに連れていった。影の中光るマル・エスピリトゥの黄金の瞳が不気味で身を固くした。悲鳴を上げた口をエスピガが優しく塞いだ。

「この子が病気になったの」

エスピガがマル・エスピリトゥに言った。承知したマル・エスピリトゥは私の手に息を吹きかけ、私が暴れないのを確かめると、彼の顎に私の手は挟まれていた。マル・エスピリトゥの口に牙はなかった。彼は山岳で暮らす大型の草食動物に似た姿をしていたので当然かもしれない。少しだけ噛まれたがすぐ離された。それから半時後に熱は引いた。

長じるに連れて、マル・エスピリトゥは既に名前を得ているのではないかと思うようになった。彼を繋ぐ黄金の手綱のせいだった。あれは名前を忘れきっておらず、まだ人と獣の姿を行き来している悪魔に使うものだと思いついたからだ。エスピガが名前を付けないのはマル・エスピリトゥが名前を忘れていないか、もう既に別の名前を付けているからではないか。私は後者だと思う。そうだとすると、

マル・エスピリトゥがおとなしくしている理由もわかる。獣は元来凶暴で調教がいるが、それを施している様子はない。名をつけることでエスピガと彼の間は何らかの契約関係が生じているのではにだろうか。

エスピガは年老いてよく寝込むようになった。その頃の冬、私は彼女の養子になった。エスピガの財産は私に譲られる。

「でも、エスピガ。私にマル・エスピリトゥは要らないのです。あなたが死んでしまったあとを彼を飼いつけるなんてまっぴらです」

そう伝えなかったが、彼を大事にするエスピガのことを思うと何も言えなかった。

数年がたち、とうとうエスピガとの別れの刻がきた。マル・エスピリトゥは痛みや熱をとることはできても死を追い払うことはできなかった。でも、おかげでエスピガはあまり苦しまずに息を引き取った。

エスピガの葬儀の準備が始まる前に、私はマル・エスピリトゥの手綱を取って犬舎から連れ出した。悪魔のやつは何十年も同じところにいたくせに足は萎えず、足取りはしっかりしていた。手綱を引く私についてやっていっていると云わんばかりだった。

家の裏門に來るとマル・エスピリトゥの手綱を外した。

「エスピガが死んだのだ。もうお前はここにいてはいけない」

結局エスピガはマル・エスピリトゥをどうしてほしいかを言わずに死んだ。

私の言葉を聞いてマル・エスピリトゥは逃げもせずその場でじっとしていたが、身体をゆすると炎のような光を放ち、人間の姿にな

った。

「やはりお前は獣になりきっていなかったのだな」

マル・エスピリトウの顔に意地の悪い笑みが浮かんでいた。

「名前を覚えてお前に従おうか。エスピガの魂を呼び戻したくはないかね？」

エスピガと過ごした時の記憶が一度に押し寄せてくる心地がした。

「必要ない」

エスピガの養子になってからずっと考えていたことを言った。

「それでは彼女の魂は私だけのものだ」

そう言つと悪魔は忽然と姿を消した。

悪魔を必要ないと思うのには嫉妬心も手伝っていた。愛しいエスピガ。悪魔を捕まえて魅了されていた。私がエスピガに寄せる愛情もかなわないほどエスピガはあの悪魔に心を奪われていた。

たった一人の肉親を悪魔に奪われた代償の余生が始まった。

（後書き）

根気があつたら関連話書きますね。

エボカシオンはアルベニスの楽曲イベリアから。エスピガはスペイン語でスピカのことです。マル・エスピリトゥもスペイン語の辞典から引つ張ってきました。使い方がおかしかったらすみません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1875v/>

エボカション

2011年10月3日05時52分発行